

Title	甲午改革期渡日朝鮮人留学生の人脈形成と社会進出： 申海永一派に着目して
Sub Title	Network and social activities of Korean students in Japan during Gabo reform period : focusing on the group of Shin Haeyeong
Author	榎谷 祐一(Masutani, Yuichi)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2016
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.33, (2016.) ,p.201- 233
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20160000-0201

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

甲午改革期渡日朝鮮人留学生の人脈形成と社会進出

——申海永一派に着目して——

榎谷 祐一

はじめに

甲午改革期（一八九四年七月～一八九六年二月）⁽¹⁾、朝鮮政府は、一八九五年五月を皮切りに日本に総勢一五〇名以上の留学生を派遣した。⁽³⁾これは朝鮮政府が海外に大量の留学生を派遣した最初の試みであったことから、つとに政治外交の側面から考察が行われた。⁽⁴⁾また留学の成果として、留学経験者の経済学、法学の受容を分析した研究も蓄積している。⁽⁵⁾また、留学生に関する資料紹介も進められている。⁽⁶⁾こうした研究で、日朝政府の動向、留学生の現実認識、留学経験者の知識受容の様相などが明らかになっているが、留学生の留学中の活動については、概略的な説明に留まっている。

留學生の留學中の活動については、車培根⁽⁷⁾、朴賛勝⁽⁸⁾の研究が注目される。なかでも朴賛勝はこの時期の留學生の身分、社会背景、朝鮮政府の留學生派遣事業の開始から中断までの過程、留學生の留學中の動静と思想形成、帰国後の活動まで、網羅的に検討している。その研究のなかで、朴賛勝は「官費留學生の留學が、肯定的な結果をもたらすことなく、無意味にまたは否定的な結果に終わってしまった理由はどこにあったのだろうか」と問題提起し、「もともと官僚志向的な性格」「留學過程において日本に対する抵抗感の弱化」「大韓帝国の政府から受けた冷遇」「統監政治（一九〇五）以後に出世」などをその原因とし、「朝鮮側の留學生政策は失敗」であったと結論づける⁽⁹⁾。朴賛勝の問題提起自体が否定的な観点に立っていることに現れているように、先行研究は、その程度の差はあれ、朝鮮政府の留學生政策を失敗とみなしている。

本稿では、こうした結論に疑問を提起し、先行研究で見落とされていた事実を拾い上げつつ、甲午改革期渡日留學生の人脈に注目して考察する。留學生には数人のリーダーが存在したが、彼らのなかでも、特に支持されたのが申海永である。申海永は、帰国後も教育の場でリーダーシップを発揮し、一九〇五年設立普成専門學校（現高麗大学校）の初代校長を務めた。本稿で注目するのは、留學生の一部が申海永を中心とするグループを形成し、その人脈が帰国後の社会進出にも影響を及ぼす過程である。そして、彼らが自強運動期において他のグループと区別し得る緩やかな同質性を持つ「一派」を形成していたことを論じる。先行研究では申海永を含め、留學生のリーダーの役割について関心を寄せておらず、申海永についての研究も進んでいない⁽¹¹⁾。

なお、甲午改革期渡日朝鮮人留學生は、一部の例外を除き、まず慶應義塾に入学した。その名簿は『慶應義塾入社帳』に記録されているが、すでに何度も紹介されているため、本稿では再度指摘しない⁽¹²⁾。

一 リーダーの登場

甲午改革期渡日留学生の第一陣一三人は一八九五年五月一日、慶應義塾に入学した。その一日後である、五月一二日に親睦会が結成され、評議員選挙が実施された。留学生団体がこのように迅速に組織できたのは、古参の留学生の助力によるものである。すでに知られているように、尹致旼、魚允迪、李秉武、朴義秉らが先に留学しており、新来留学生の東京到着の際には「大朝鮮国諸生同窓学会」と書かれた旗を振って出迎えていた。⁽¹³⁾『読売新聞』には、この団体についても少し詳しい記述がある。

目下我邦に在留する朝鮮人は同国人の親睦を厚ふし疾病困苦相救護する約束にて今度大朝鮮国諸生同遊学会なるものを創設し、允致果を会頭に推挙し金公使韓訳官其他は名誉賛成員若くは評議員等に推薦せしと云ふ。⁽¹⁴⁾

ここでは「大朝鮮国諸生同窓学会」が「大朝鮮国諸生同遊学会」となっている。允致果は尹致旼の誤りであろう。金公使は金思純のことで代理公使、韓訳官は韓永源を指す。つまり、大勢の留学生が渡日するのに合わせて、古参の留学生が団体の結成を計画し、すでに尹致旼を会頭に推挙し、名誉賛成員、評議員などの役職も決まっていた。

親睦会結成にあたり、実際に評議員に選ばれたのは（表一）の人物であった。

〈表一〉 親睦会評議員選挙得票数

姓名	新旧	生年	得票
申海永	新	1870	110
尹致昨	旧	1869	108
魚允迪	旧	1868	103
朴義秉	旧	1872	88
李秉武	旧	1864	60
洪奭鉉	旧	1873	46
韓永源	一	1871	45
魚瑯善	新	1869	39
金鎔濟	新	1868	38
趙齊桓	新	1872	35
安衡中	新	1871	35
張台煥	新	1871	30

出典：『親睦会会報』1、1896年2月、96～97頁

先行研究でも、評議員選出について言及があるが、踏み込んだ考察をしていない。大方古参留學生が上位を占めており、団体結成のリーダーであったことが分かる。韓永源は留學生ではないが、オブサーバーとして参加している。その中で新来留學生である申海永が古参の留學生を抑え最高点で選出されていることと、古参留學生である洪奭鉉が相当に低い点数であることに注目したい。ここでは留學生から高い支持を得た申海永と、古参留學生の中心メンバーから外れた洪奭鉉を中心に留學生の派閥形成を探っていく。

洪奭鉉から述べれば、彼は甲午改革期における留學生の中では最初期の學生であった。一八九四年四月八日付『東京朝日新聞』によれば、彼は京城日語學校の生徒であり、秀才であった。ある日、ひそかに仁川に下り日本軍艦を見物したところ、朝鮮官人の疑惑を受けて叛逆の念ありとして同校を放逐された。洪奭鉉は奮然として所有品を売却、旅費を準備し、断髪して三月三十一日出帆の伊勢丸に搭乗して日本に渡った。記事では、まだ東京に到着しておらず、「一種の専門学を修むる」予定であることだけを伝えている。⁽¹⁶⁾その後、一八九四年内に東京専門学校（現早稲田大学）⁽¹⁷⁾に入学した。一二月には中島安邦が神田の雲陽小学校内に朝鮮語学会を設立し、洪奭鉉を教師として招聘している。⁽¹⁸⁾また一八九五年二月には、麹町区の明治議会内に朝鮮語研究会が設立され、その教師に招聘された。⁽¹⁹⁾一八九四年八月二日印刷二八日発行で博文館から『新撰朝鮮会話』を刊行していることも目を引く。

つまり洪奭鉉は、対日感情の厳しい一八九四年三月の時点で、単身で日本に渡り東京専門学校に入学する一方、教師としても活動し、出版も行なった、よって留学以前から相当の語学力も有していたものと思われる。

申海永は、留学以前、師範学校の「助教授」であつた。⁽²⁰⁾ 師範学校は一八九四年一〇月一六日に京城校洞で開学した。⁽²¹⁾ 「教授」は五六歳の鄭雲樓であつた。申海永については、これ以前の経歴が史料上明白ではなく、先行研究もこれ以上の情報を見出していない。しかし手がかりとして、二月一四日付『東京朝日新聞』に「師範学校は城内校洞に在り目下夜学とし教師は日語学校助教師安泳中氏及同学校生徒一名にして真に名実相副(かな)はざるものなり」と⁽²²⁾と報道されていることに注目したい。師範学校の教師は実力が物足りないという否定的な内容ではあるが、注目すべきは、その教師が日語学校助教師安泳中と日語学校生徒であるという情報である。安泳中も日語学校卒業生であつた。この日語学校生徒が五六歳の鄭雲樓であつたとは考えられず、よつてこの生徒は当時「助教授」だつた申海永だと推定される。

申海永は、史料から明白な経歴をたどれないことから名門の生まれではなかつたと思われる。しかしその後の活動から推してみると、彼は秀才であつたようである。師範学校の「助教授」に抜擢されたのも、門地によるものではなく、その能力を買われたものであろう。

二 日語学校と留学生の選抜問題

申海永が日語学校出身であつたとすれば、申海永と洪奭鉉は日語学校で共に学んだ間柄であり、留学以前から接点があつたことになる。また留学生のなかに日語学校出身者が多数含まれているが、先行研究では留学生

と日語学校の関連性について深く考察していない。日語学校については稲葉継雄が体系的な研究を出しているもの⁽²³⁾、甲午改革以前についてはほとんど考察が及んでいない。よって、ここでは日語学校にも触れながら、留学生の選抜問題を見ていく。

京城日語学校は一八九一年六月に設立された。その在籍学生の全貌は明らかにできないが、一八九四年一月三十一日付『読売新聞』の報道によると、この当時の在籍学生は一八九一年秋開校時入学生（甲級）が安泳中他八名、一八九二年冬入学生（乙級）が高義駿他一三名、合計三三名であった。また一八九四年二月六日付『東京朝日新聞』には、「日本語の学校は従来の日本語学校を日語学校と改称して本月一日より開設したるが其教師は永島岳次郎、助教師は学務衙門主事安泳中（前日本語学校卒業生）にして生徒四十名あり」とある⁽²⁴⁾。つまり、一年以上在籍の生徒二三名のほかに、二〇名ほどの初学者（おそらく丙級）がいたことになる。

日語学校生徒のうち、朴基駿、李龍在、姜璟熙、高義駿、玄公廉、慎順賊の六人が一八九四年冬に日本人の斡旋により留学したことは、別稿ですでに指摘した⁽²⁵⁾。そして他の日語学校生徒も多くが留学を希望したようであり、「去月中熊本なる九州学院の企望に因り日語学校の生徒二人を同学院に送りしや、取り残されたる同級生等慙憤自ら禁ぜず教師に向て切に衷情を訴ふる様は現に予の目撃する所」と報道されている⁽²⁶⁾。また四月一日付には「今度朝鮮政府に於て日語学校より秀才の学生六十名を抜擢し日本に留学せしむる筈にて李公使と共に十五日頃出發來朝する由なるが、其内咸鏡道の学生三十名は武官となす筈にて之を教導団に入れ士官学校に入学せしむべしと云ふ」という報道が見える⁽²⁷⁾。しかし留学生の選抜が杜撰であったため、一部の生徒は留学できなかつたようである。たとえば、留学生試験について「何故か高点を落撰せしめて落点者を当撰せし者多きは不平の声囂々たり⁽²⁹⁾」であったという。『時事新報』は、留学生のクラス分けて甲級に組まれた者一二名の

うち、三名は昨年入学生、九名は京城日語学校の二年生であると伝えた。その九人とは金重漢、卞志琬、金允求、張明根、朴正善、趙元奎、金東完、劉文相、吳亭根である。⁽³⁰⁾この九人に含まれない金鴻南、安昌善も日語学校出身であるが、彼らは日語学校一年生であった。⁽³¹⁾その後、ひと月遅れて六月に留学した二六名の留学生のうち、金益南、朴正銑は日語学校出身であることが確認できる。⁽³²⁾よって日語学校生徒のうち少なくとも二一名は渡日留学したことになる。⁽³³⁾

さらに、申海永が「助教授」を務めた師範学校、及び師範学校附属小学校出身の留学生として金鎔濟、朴叙陽、金教先、魚潭の四名が確認できる。⁽³⁴⁾他に官員にならなかつた者、あるいは履歴書の残っていない者で日語学校出身者、あるいは師範学校、附属小学校出身者がいる可能性がある。

ともかくも日語学校、師範学校、附属小学校を通じてソウル在住の一部の留学生たちは留学以前から交流があった。申海永は留学以前から日語学校のリーダー、あるいは師範学校の先生として人望を得ていたものと思われ、それが親睦会結成の役員選挙でトップの人気を得た理由と推察される。

三 申海永と洪奭鉉の対立

洪奭鉉は留学生としては最も古参であったが、親睦会結成の中心メンバーではなかつたようである。親睦会の記録でも、「先に留學員尹致旣、魚允迪、朴義秉、李秉武、及び本公使書記生韓永源諸氏は本政府派遣の學員が来るのを聞き、親睦会を立てることを議論した」とあるが、そこに洪奭鉉の名はない。⁽³⁵⁾〈表一〉に見るように、評議員選挙でも古参の留学生のなかでは得票数が最も低かつた。しかし洪奭鉉は親睦会の活動には積極

的であった。一八九五年七月一日には事務員として特別賛成員簿を担当している。⁽³⁶⁾新聞では留学生団体の結成を報じて「韓人洪奭鉉（大江恭次郎）氏自ら朝野諸名士を訪問して賛襄を求めつつあり」と伝えている。⁽³⁷⁾

一八九六年二月、露館播遷で留学生たちが動揺するさなか、二月二十八日に留学生のうち林炳龜、李範寿、金憲植、安禎植、呂炳鉉、李廈榮の六人が親睦会会費を盗んで渡米する事件が発生する。この事件の責任を取る形で会長魚允迪は辞任し、四月二十六日、洪奭鉉は選挙を通じて臨時会長になった。臨時会長となった洪奭鉉は翌日、再び選挙を行なうことを提議し、二八日、臨時会で正式に会長に選出される一方、副会長申海永は解任され、安衡中が就任した。しかし、洪奭鉉の運営に不満が起こり、一月十五日、会長に申海永、副会長に魚踏善が選ばれ、洪奭鉉は半年で再び主導権を奪われた。⁽³⁸⁾申海永と洪奭鉉の対立は以上のようないきさつで鮮明になるが、その過程で留学生のもう一つの団体である日韓俱樂部が現れることに注目したい。

日韓俱樂部は一八九六年一〇月に東京専門学校で発足した。⁽³⁹⁾この時期は留学生が慶應義塾を卒業し、彼らうちの何人かが東京専門学校に入学した時期と重なる。この団体は東京専門学校の学生と朝鮮留学生の交流を目的に結成されたものであり、会員は学校を問わず入会を許可した。参加者は地方会員を含めると百名ほどであり、例会参加者は三〇人ほどであった。そのうち、韓国人参加者として確認できる者は、洪奭鉉、鄭寅昭、尹星求、李寅植、劉文相、安明善、朴太緒、安慶善、金大熙、愼順賊、姜龍甲、禹泰鼎である。活動は主に茶菓を囲んだ親睦会であったが、演説や講師を招請した講演会なども開かれた。

日韓俱樂部が発足した一八九六年一〇月に親睦会も事務所を東京専門学校に移している。⁽⁴⁰⁾しかし、『親睦会会報』には日韓俱樂部に関する記事が出てこない。それは親睦会と日韓俱樂部との間に関連性がないことを示唆する。申海永と洪奭鉉との対立が親睦会内における洪奭鉉の失権で決着した後、洪奭鉉は日韓俱樂部を中心

に活動していた。そして二人の対立がくすぶるなか、一八九七年五月三日、『読売新聞』に次のような記事が掲載される。

目下我邦に滞在中なる亡命韓客等は二派に分れて軋轢是れ事とし互に排擠せんとする形跡あるは心ある者の窃に慨歎する所なるが、今其真相を聞くに甲は義和宮、朴泳孝、禹範善、李圭完、卓^甲応熙、劉世南等の一派にして義和宮、朴泳孝を中心とし、乙は李竣鎔、兪吉濬、趙義淵、張博、李斗璜の徒にして李竣鎔之が牛耳を執り、互に他を罵詈攻撃して事を共にするの精神毫末之れなしと云ふ。而して李竣鎔の一派は自由党の松田正久氏始め同党の有力者隠然之を扶け居る趣にて殊に李竣鎔は祖父大院君より資金を取寄せ留学生に金圓を与へ之を味方となさんと勉め居る由。左れば八十余名の留学生中既に五十余名は同氏の幕下となり他の三十余名は義和宮派なりと云ふ。⁽⁴¹⁾

留学生らが亡命者と組んで対立しているというこの記事は、留学生にとって非常に不快なものであるのみならず、帰国後の身辺に危険を及ぼすものでもあった。親睦会は五月一日に委員会を開き、この記事の取消を新聞社に求めると共に、投稿者の調査を行なった。⁽⁴²⁾ その間、五月一六日付『国民新聞』にまたもや次のような投書が掲載された。

朝鮮留学生党派正誤及委員会決議。不偏不党惟我学生中党派之談実為無根之説故限十日以撰新紙上誣著者未搜其源則至於裁判而以■■■■迪弊也。然至逐於李竣鎔氏以義牛耳之説豈我■■■哉。李公子以我東洋英

雄大院君之孫也。其容觀壯惠可成不及之王霸也矣。然坐其聞說牛耳之談豈不憶哉豈不備哉。今決搜■不啻以愆後冒勿為妨害於竣公子畢竟為霸之前■也。故以為決斷而此中代表者如左

會長申海永

副會長魚瑢善

其他評議員六名

幹事一名

幹督一名⁽⁴³⁾

この記事には大院君の孫李竣鎔を「成つて及ばない王霸也」と皮肉る内容が含まれていた。留学生らはずぐに新聞社に抗議することに決し⁽⁴⁴⁾、翌一七日、国民新聞社を訪問すると、その投書の差出人が「申海永」となっていたものの、彼の筆跡ではないことが分かる⁽⁴⁵⁾。申海永らは五月二四日、慶應義塾大広間にて臨時会を開き、今度の誹謗文書を投稿したのは洪奭鉉と鄭寅昭であると結論づけ、二人を除名処分にした。洪奭鉉が読売新聞記者の一人と懇意にしていたことが容疑の一つの根拠になった⁽⁴⁶⁾。また、国民新聞社の徳富蘇峰は洪奭鉉の著書『新撰朝鮮會話』に序文を寄せていることから⁽⁴⁷⁾、『国民新聞』掲載の怪文書の出处と洪奭鉉との関連性も疑われる。

洪奭鉉はこれに対し『読売新聞』に抗議の投稿文を送っている⁽⁴⁸⁾。それに依れば、「余は我国の将来に有望なる留学生諸氏が事実無根の事を捕へ来りて余を中傷するの甚だ軽率なるは賢明なる留学生一般の意志に非らざるを信ずると共に、諸氏は一部の人の為に謬られたるなきやと疑ふ者なり」と言い、自分は何者かに陥れられたものだと言張している。

ここでこの事件の真相を明らかにすることは不可能であるが、実際に留学生が申海永派と洪奭鉉派に分かれて争っていたことは事実であり、それに亡命者の助力が加わっていたこともおおよそ事実であろう。亡命者の中核である朴泳孝と兪吉濬は共に留学生派遣を主導した人物であり、留学生の幾人かは彼らと親戚関係に

あった。⁽⁴⁹⁾ また、鄭喬は「申海水と魚瑢善の二人は日本で兪吉濬に付いていた」⁽⁵⁰⁾と記録している。

洪奭鉉は親睦会で主導権を握れなかったため、東京専門学校で設立した日韓俱樂部を中心に活動した。一方、親睦会は申海水一派を中心に運営されたため、日韓俱樂部が「親睦会日記」に記録されることはなかった。親睦会はその後、活動が停止したが、後身として帝国青年会という団体が設立された。その設立メンバーは申海水、趙齊桓、張燾、盧伯麟、元応常、康永祐などであった。⁽⁵¹⁾ 帝国青年会は一九〇三年まで存続したと伝えられている。⁽⁵²⁾ なお留学生のリーダー申海水は慶應義塾卒業後、大蔵省で実習を行ない、一八九八年一〇月初旬に帰国した。⁽⁵³⁾

四 官界進出の様相

「はじめに」で指摘したように、朴賛勝は、留学生を「官僚志向的であった」とし、日露戦争後に官界に進出したのは、留学生の親目的要因によるものと論じている。本節では、この結論を再考しておきたい。

朴賛勝の研究によれば、一八九五年四月、五月、十一月に慶應義塾に入学した留学生（一五一名）のうち、帰国後に官職についた者は六〇名で全体の三九・七％に過ぎず、日露戦争以前に官職についた者は三九名（二五・八％）であった。⁽⁵⁴⁾ この数字を見て、朴賛勝は、「大韓帝国の政府が留学生出身を警戒」していたために、日露戦争以前に留学生たちは官職につけなかったと説明する。⁽⁵⁵⁾

確かに留学生の官吏就職は順調ではなかった。しかし、それは朴賛勝のいうような「警戒」のためではなく、以下のような要因によるものである。

第一に、就職先に空席がなかった。留学生として最も早く大学を卒業した洪奭鉉について、学部は法部に照会し就職を斡旋したが、法部は国内の法律学校卒業生の席を確保することも困難な状態であり、政治学を学んだ洪奭鉉を法部で受け入れる需要がないと拒否したことが報道で伝えられている。⁽⁵⁶⁾ 成均館儒生においても就職がないという問題が起きていた。⁽⁵⁷⁾ 学生の就職問題は留学生に限ったことではなかった。

第二に、留学生が官職を好まなかった。留学生のうち、官員に任命されても「依願免本官」として仕官しない者がいた。本稿の調査では一三人が確認できる。⁽⁵⁸⁾ 朴賛勝のいうように留学生が官僚志向的であったならば、積極的な行動があったはずである。しかし、留学生自身が官員に採用してほしいと訴えた記録は、政府資料にも新聞にも殆んど探し出せない。一九〇五年五月に韓震用が銓考請願書を提出したのが唯一確認できるのみである。⁽⁵⁹⁾

第三に、官吏としての適正年齢の問題である。官吏任用を研究した鄭求先によると、一九〇五年五月から一九一〇年一月、すなわち日露戦争以後に実施された文官銓考試験合格者及び一九〇六年一二月に実施された法官銓考試験の合格者は、一八七〇年代生まれが中心であった。⁽⁶⁰⁾ 留学経験者もまた、一八七〇年代生まれが中心である。⁽⁶¹⁾ 留学生が日露戦争以後に官界に進出したのは、年齢と能力の成熟による面も大きい。

統計的考察において、朴賛勝は、慶應義塾に入学した渡日留学生一五一名を対象に上記の結論を導いている。しかし基礎課程である慶應義塾普通科すら中途退学した者を政府が進んで官吏に採用する道理はない。⁽⁶²⁾ よって調査は慶應義塾普通科卒業生及びそれと同等以上の学生に限定すべきである。すると『親睦会会報』に記録されている慶應義塾普通科卒業生は七二名であり、⁽⁶³⁾ 王種植と嚴柱日は高等学校に進学、尹邦鉉は官庁にて研修に入ったため、卒業同等と見なし、合わせて七五名が抽出できる。⁽⁶⁴⁾ また筆者の調査では、慶應義塾に入学

していない留学生で、高等学校あるいは技術研修を受けている者が一五名いる⁽⁶⁵⁾。さらに成城学校に入学して士官候補生となった者一三名は統計から除外する。成城学校に入学してから、学費の支給元が学部から軍部に移っていることと、軍人の出世コースは必ず任官されることになるためである⁽⁶⁷⁾。よって残った七七名を対象にして統計を取り直すと、六六名(七七名に対し八五・七%)⁽⁶⁸⁾が官員に任命されており、日露戦争前に限っても四一名(五三・二%)⁽⁶⁹⁾が官員に任命されている。政府が大学卒業を確認した留学生に限定すれば、二三名全員⁽⁷¹⁾が官員に任命されている。政府が中途退学者を官員に採用しなかったため、全体として採用率が低いように見えているだけであり、能力のある留学生は適宜採用されている。よって政府が留学生を忌避したという指摘は当たらない。しかし、留学経験者は「依願免本官」で仕官を拒否し、あるいは積極的に登用を申し出ることをしなかった。留学生の関心は別のところにあつたためである。

五 独自の自強運動

留学生たちは一八九六年冬には全員慶應義塾普通科を卒業した⁽⁷²⁾。卒業生は職業訓練を受け、また年少の者は大学などに進学したが、早い者は一八九七、八年には帰国した。この時期の朝鮮は独立協会運動がたけなわであり、政權参与を主張する独立協会とそれを抑えようとする勤王派との対立が激化していた⁽⁷³⁾。

親睦会は『親睦会会報』を独立協会に寄贈しており、独立協会もそれに対して『独立新聞』の「論説」などで書評を加えて称賛している⁽⁷⁴⁾。また留学生南舜熙、安明善、安昌善が『大朝鮮独立協会会報』に寄稿しており、申海水が『親睦会会報』第二号に掲載した「漢文字と国文字の損益如何」が『大朝鮮独立協会会報』に

転載された。⁽⁷⁶⁾ 独立協会に寄付した留学生も確認できる。⁽⁷⁷⁾ 独立協会の青年部ともいえる協成会、その協成会の母体である培材学堂と留学生の繋がりも確認できる。⁽⁷⁸⁾

一方、留学経験者は独立協会と協調しつつも、別に活動したようである。一八九八年五月二十五日執筆六月三日付『時事新報』は「李秉武、魚允迪等の主唱に成れる進明会あり」と伝えている。⁽⁷⁹⁾ 李秉武、魚允迪ともに留学経験者である。進明会は独立協会と親和して万民共同会に合流した。一方、申海水、魚瑑善は独立協会と対立する皇国協会に参加した。⁽⁸⁰⁾ その後、二人は万民共同会に合流し、一月一日に総代委員として姜賛と共に政府に意見書を提出している。⁽⁸¹⁾ 独立協会は一八九八年一二月に解散させられ、以後、韓国内において日露戦争後まで主だった団体活動は展開されなかった。

日露戦争以後、雨後の筍のごとく発生する団体活動は、愛国啓蒙運動、あるいは自強運動と呼ばれている。この時期になれば、留学生たちもほとんどが帰国している。自強運動時期、留学経験者が参加した団体を整理すれば、〈表二〉の通りである。

表に上げた団体は、自強運動団体の主なるもので留学経験者が確認できるものである。団体のうち、西北学会、湖南学会、畿湖興学会、嶠南教育会は地域コミュニティの性格を持っている。一進会及び大韓自強会（後に大韓協会）は代表的な政治志向団体である。大東学会は儒教振興を目的とする団体、法学協会は法律研究を目的とした学術組織、工業研究会は工業伝習所の学生たちの設立によるもので、賛成員として社会人が参加している。ここで注目すべきは、留学経験者の多くが参加している大韓俱樂部であろう。

大韓俱樂部は、一九〇五年九月二四日に東小門外新興寺で外国留学経験者の提議により、六〇余名が集まって結成された団体である。⁽⁸²⁾ 発起人は、洪在祺、嚴柱日、李冕宇、柳東説、張燾、金祥演、朴斗榮、申海水、石

(表二) 渡日留学経験者の自強運動団体参加調査

一進会 (1904.8)	張憲植 (自衛団援護会 会長) 金教興 (大皇帝陛下即位慶祝 会場委員) 李熙斗 (忠清北道支部会長) / 張東煥 (評議員)	3/1名
大韓俱樂部 (1905.9)	權鳳珠 (評議員) 金寬鉉 (収金委託員) 金教興 金東完 金明集 金祥演 (懇親会発起人) 金相淳 金鏞濟 (賛成金請求委員) 金允求 (金倫求) 金益南 金義善 朴晚緒 申海永 (臨時部長) 安昌善 魚躍 魚路善 (部長) 魚允迪 (賛成金請求委員) 嚴柱日 (懇親会発起人) 元応常 (編纂員) 劉文煥 (評議員) 尹珩鉉 尹致暎 李冕宇 (評議員) 張憲植 (収金委託員) 鄭寅韶 趙亨 / 朴叙陽 呂炳鉉 (臨時会長) 李源昇 張依休	39/4名
大韓自強会 / 大韓協会 (1906.4)	魚路善 (評議員) 禹泰開 鄭在淳 金鴻鎮 金東圭 朴完緒 安明善 (安国善) 李周煥 崔万達 李正熙 李正秀 呂炳鉉 (評議員) 李謹相 (李瑾相?) 吳亨根 李正熙 (湖州支会 評議員) 李圭三 李儒哲 李在夏 李鍾華	10/8名
西友学会 / 西北学会 (1906.1)	金祥演 金亨燮 (評議員) 金義善 (評議員) 李寅植 李正熙 (价川郡支会 評議員) 韓鳳儀 (韓鳳儀) 韓慶用 / 金敬濟 (本会代表取次意見 賛同者) 金錫胤 金正燮 呂炳鉉 吳亨根 尹基周 李謹相 (李瑾相?) 李在夏 (价川郡支会 評議員) 張東煥 (長淵郡支会 評議員)	7/9名
湖南学会 (1907.7)	洪仁杓	1名
大東学会 (1907.7)	金大熙 (寄稿) 金東完 (評議員) 金祥演 徐丙吉 李鍾華 曹秉集 稿) 李憲珪 洪仁杓 (寄稿) / 朴叙陽 徐丙吉 李鍾華 曹秉集	10/4名
畿湖興学会 (1908.1)	權鳳珠 (贊務員) 樞柔稜 (贊務員) 金敦先 (贊務員) 金教興 (洪州郡支会 評議員) 金大熙 (寄稿) 金益南 (贊務員) 金鴻南 (贊務員) 朴晚緒 安国善 (月報著述員) 魚路善 (評議員) 魚允迪 (評議員) 元応常 俞承兼 (評議員) 劉文煥 (贊務員) 尹致暎 (贊務員) 李冕宇 (評議員) 李熙斗 (評議員) 張憲 / 金星圭 徐丙吉 (月報著述員) 趙亨恒 (贊務員) 崔相敦 (贊務員) 韓万源 (贊務員) 文欄 (畿湖学校任員 教師) / 金星圭 徐丙吉 (月報著述員) 呂炳鉉 (評議員) 李圭三 (贊務員) 李源昇 (贊務員) 李鍾華 (寄稿) 李哲宇 (贊務員) 李詰宇 (?)	23/7名
嶮南教育会 (1908.3)	卞国璋 金鴻鎮	2名
法学協会 (1908.3)	金祥演 (評議員) 朴晚緒 申佑善 安国善 俞承兼 (評議員) 俞承兼 (評議員) 劉文煥 (評議員) 李冕宇 (評議員) 張憲 (評議員) 張憲植 (会長) 鄭寅韶	11名
工業研究会 (1908.9)	權鳳珠 安国善 安衡中 俞承兼 尹世鍾 尹致暎 文欄 洪仁杓 尹致暎 李熙斗 / 呂炳鉉	10/1名

出典：『畿湖興学会月報』『大韓自強会月報』『大韓協会の会報』『西友』『西北学会月報』『嶮南教育会月報』『湖南学会月報』『大韓俱樂部』『工業界』『元韓国一進会歴史』(文明社、1911年)。調査対象は慶應義塾普通科卒業生。「/」の後ろは参考として中途帰国者。また()には職責、寄稿事実など代表的なものを挙げる。史料上、姓名が正確に一致しないが、当人であると推測される場合、「?」を付した。

鎮衡、柳東作、徐丙珪、申佑善、權鳳洙、兪承兼、李甲の一五人であり、そのうち、嚴柱日、李冕宇、張燾、金祥演、申海永、申佑善、權鳳洙、兪承兼の八人は甲午改革期の留学経験者である。⁽⁸³⁾ 大韓俱樂部の結成式について、『皇城新聞』は「誠に我が国由来未曾有の一大盛況であった」と伝えている。⁽⁸⁴⁾ 未曾有の一大盛況だったかはともかく、大韓俱樂部が社会に大きく注目された団体であったことは間違いない。

ところで、大韓俱樂部が発行した機関誌『大韓俱樂部』の会員名簿には二一人が記録されているが、独立協会の中心メンバーの参加が少ない。独立協会で役員（任員）であった人物のうち、大韓俱樂部の会員名簿に名があるのは、金重煥、李建鎬、李秉武の三人である。そのうち、李秉武は甲午改革初期に派遣された留学経験者である。つまり、独立協会と大韓俱樂部は構成員につながりがない。それは先に見たように、留学経験者たちが独立協会とは別に活動をしていたからである。とくに彼らは教育に関して申海永を中心に際立った活動をしている。

まず一八九八年九月二四日に設立した光興学校に、魚瑠善と南舜熙が教師として就任した。⁽⁸⁷⁾ この学校に申海永、金鎔濟、權鳳洙も教師として参加している。⁽⁸⁸⁾ 一九〇〇年、光興学校は法律科を設置し張燾、劉昌熙を教師とした。⁽⁸⁹⁾ ここに挙げた教師はすべて留学経験者である。また一八九九年五月、申海永は光成学校の教師に招聘されている。光成学校は学校の維持のため「評議員二十五名を選定した」というので、⁽⁹⁰⁾ 相当規模の大きな学校だったようである。留学経験者は他にも種々の学校の教師になっているが、⁽⁹¹⁾ 一九〇五年一月、漢城法学校の教師として權鳳洙、劉文煥、李冕宇、申佑善、申海永、兪致衡、張燾、洪仁杓が集まっているのは注目される。⁽⁹²⁾ そして、一九〇五年四月、普成専門学校（現高麗大学校）の設立にあたって、申海永が校長となり、申佑善、元応常、劉文煥、兪承兼、兪致衡、李冕宇、張燾、張憲植、趙齊桓が教師として採用される。⁽⁹³⁾ つまり留学経験

者の一部は、帰国後も教育の現場で行動を共にしていることが確認できる。彼らは留学時代、申海永を中心に活動していたメンバーで、帝国青年会のメンバーとも重なり、留学後もその人脈が維持されていたといえる。一九〇七年四月、申海永は留学生監督として東京に赴任する⁽⁹⁴⁾。申海永一派はそれ以後、申海永不在のまま活動することになる。

六 研究者志向——『法政学界』、法学協会

大韓倶楽部は一九〇七年一月頃には活動が沈滞していたようである。一月二四日、大韓倶楽部の維持に關する総会が開かれた⁽⁹⁵⁾。その結果を示す史料はないが、おそらくこの総会で解散が決まったものと思われる⁽⁹⁶⁾。これと時を同じくして一九〇八年一月に畿湖興学会が設立した。大韓倶楽部を主導した留学経験者は、畿湖興学会においても主導的地位についている⁽⁹⁷⁾。また畿湖興学会の総会は、普成専門学校で行われていた⁽⁹⁸⁾。よって大韓倶楽部の活動は畿湖興学会に替えられたと言えよう。

大韓倶楽部は、その設立当時の絶賛に見合うだけの活動を成し得なかった。大韓倶楽部として行なった活動としては、会報『大韓倶楽』を二号発行したこと⁽⁹⁹⁾、渡日留学生団体太極学会の創立の際に募金活動を行なったくらいである⁽¹⁰⁰⁾。集会はしばしば行われていたが、『大韓倶楽』の記事だけで判断すれば、会員間の親睦に留まっている。新聞報道もほとんどなく、政治的な運動はしていなかったと考えられる。

しかし、一度だけ大韓倶楽部が政治的な立場を表明したことがあった。それは、一九〇五年一月一日、親日団体として知られる一進会⁽¹⁰⁾が大韓倶楽部に送った宣言書⁽¹⁰⁾に対する回答である。この宣言書とは、韓国が日

本の被保護国になることに賛成の意を示したものである。それに対する大韓倶楽部の回答は「皇城新聞」を通じて世間に公開された。

それ曰く、「外交之権を寧ろ友邦政府に委任しその力に依つて国権を保維する」と言い、「内治之事は徒らに庸人を用いる必要はない。寧ろ先進した顧問を拒び弊政を除去し以て民福を進めるべき」と言うが、内外交をすべて自ら抛棄して、どうして国権を保維し以て民福を進められるのか。況んやまた「その保護に拠つて国家独立を維持する」と言うので、読んでいて骨冷である。貴の云う所の誠意で同盟に対し、信義で友邦に交わることが、自束自縛に於て止まるに在つてその保護を請うのか。⁽¹⁰³⁾

一進会が外交権の委譲を通じて国権を守り、内治は先進国の顧問を招くことによつて悪政を除去できるといふ主張を展開したのに対し、大韓倶楽部は、内治外交を抛棄して独立を維持できるといふ論理は、「骨冷である」と返している。大韓倶楽部のメンバー、その中心にいた留学経験者たちは、韓国の保護国化には一理の同意もしていなかった。しかし、彼らはこうした自己の意見を積極的に対外に発信しようとはしなかった。

留学経験者が政治的発言を控えたのは、彼らが研究者志向であつたことと関わつているように思われる。一九〇七年三月二四日、普成専門学校校友会が設立されたが、この会が発行した『法政学界』は「法律経済に関する原理原則を同胞に紹介する唯一の大雑誌」を目指して⁽¹⁰⁴⁾いた。この当時、大学卒業の肩書を持つ留学経験者は最高の知識人であつた。『法政学界』は普成専門学校の会報であつたが、そこに掲載された論文は、当時において最も水準の高いものである。留学経験者は研究を通じて救国の活路を見出そうとしていたのである。

普成専門学校は皇室の内帑金で経営していたが、一九〇八年一月にその内帑金が途絶えて経営難に陥る。その時に経営権をめぐって「教主」李鍾浩と留学経験者である教師たちが対立した。この騒動は「維持会事件」と呼ばれている。⁽¹⁰⁵⁾維持会事件の後、普成専門学校の初期教師陣は、養正義塾に集まった。⁽¹⁰⁶⁾養正義塾（現養成高等学校）は一九〇五年五月一二日に開学し、開学当初の教師は金祥演、張燾、申佑善、石鎮衡であった。⁽¹⁰⁷⁾彼ら四人は渡日留学経験者であり普成専門学校の教師でもあった。一九〇六年五月には普成専門学校教師であり留学経験者である兪承兼が養正義塾の教師となった。⁽¹⁰⁸⁾つまり、養正義塾と普成専門学校は共に留学経験者が教師を務めていたのである。維持会事件の後、留学経験教師の大部分が養正義塾に移ったとき、経済学科の学生三人もまた普成専門学校を辞めて養正義塾に移籍した。⁽¹⁰⁹⁾『高麗大学校百年史』は「創立時の教師たちは慶應義塾で主に西欧受容に偏重した洋務に浸り、国権主義的な国内自強派知識人に比べて骨のない」人物であり、維持会事件の後、これら留学経験教師が去ったことよって「興学自強」の校風を起こすきっかけとなったと、この事件を肯定的に評価している。⁽¹¹⁰⁾しかし普成専門学校が留学経験教師を失って沈滞したことは否めない。養正義塾は名門校として学生を集める一方、普成専門学校は一時夜間学校となった。⁽¹¹¹⁾

一九〇八年三月、養正義塾に移った留学経験教師たちが中心となり、法学協会が設立された。⁽¹¹²⁾法学協会は『法学協会雑誌』を発行した。『法政学界』が普成専門学校の会報という性格を持ち合わせていたのに対し、法学協会は純粋な研究会として活動している。『法学協会雑誌』は論説、雑報などはもとより、判決例や法律など基礎情報を豊富に掲載しているところに特徴がある。

一九〇九年一月二六日、安重根が伊藤博文を殺害したことにより、政局は一気に不安定になった。知識人たちは率先して伊藤博文追悼会に参加し、事態の收拾を図った。⁽¹¹³⁾伊藤博文追悼会とは、一九〇九年一月に韓

全国各地で開かれた大小の追悼会の総称であるが、一九〇九年一月二日から四日にかけて催された官民追悼会、及び一月八日から開かれた国民大追悼会が最も規模の大きいものであった。留学経験者たちがこれらの追悼会に発起人あるいは委員として参加していることが確認できる。⁽¹⁴⁾

留学経験者たちにとって追悼会参加は半ばあるいは完全に強制によるものであった。韓国民がみな伊藤博文の死を悼んでいるように見せるため、学部大臣李容植はこの行事に学校を利用した。⁽¹⁵⁾ 学部はソウルの官立私立すべての学校に追悼会参加を命じ、追悼会後には各学校の学生と教師が参加したか否かを調査した。⁽¹⁶⁾ 教育界のリーダーとして普成専門学校や養正義塾で活躍した留学経験者たちは、この時期には官員としても書記官や事務官を担っており、⁽¹⁷⁾ 社会的地位からも追悼会に参加せざるを得ない立場にあった。また安重根の弟安定根が養正義塾出身であったため、学校に危害が及ぶ可能性もあった。⁽¹⁸⁾

伊藤博文追悼会は多分に政治的意味を含んでいた。漢城府民会、大韓協会、一進会などは追悼会を利用して各々が自身の主導権を強化しようとした。⁽¹⁹⁾ しかし、渡日留学経験者の場合、この追悼会をきっかけに政治的発言を強化しようとした形跡はなく、それまで通り、研究生活を続けた。

このように、渡日留学経験者たちは留學生のリーダーであった申海永を中心に人脈を形成していた。彼らは教育者、研究者として、独立協会勢力とは異なる独自の自強運動を展開した。彼らの性格は多様で一律に扱うことはできないが、団体として見れば、国権喪失と併合が次第に現実味を帯びていくなかで、これに対する政治的な発言や行動は顕さなかった。このような態度は韓国併合後も変わらなかった。

なお、申海永は、伊藤博文暗殺のひと月前である、一九〇九年九月二二日午後六時、帰任途中、門司で病死する。⁽²⁰⁾ 遺体は火葬され、留学同期である魚允迪（当時学部編輯局長）が遺骨を韓国に運んだ。⁽²¹⁾ 韓国での弔札式

は九月二七日午後八時、南大門停車場で執り行われ、遺骸は金浦の故郷に埋葬された。⁽¹²⁾ 一月二〇日午後一時、普成専門学校内で執り行われた追悼会には、総理大臣李完用をはじめ、政府高官、学生ら四百名余りが参加したという。⁽¹³⁾

おわりに

本稿で論じた内容を整理する。

第一に、申海永と洪奭鉉の主導権争いに着目した。申海永と洪奭鉉は共に日語学校で旧知の仲であったと推定され、また留学生の多数が日語学校出身であった。しかし、日語学校を退学して渡日した洪奭鉉に対し、申海永は師範学校の「助教授」に抜擢され、師範学校及び附属小学校の学生たちとも人脈を築いていた。これが申海永が親睦会でトップの人望を得た理由である。洪奭鉉は最古参の留学生であったにも拘らず、親睦会の中心メンバーではなかった。彼は親睦会の主導権の奪取にも失敗したが、日韓倶楽部を中心に独自の人脈を築いた。

第二に、留学生が「官僚志向的」だったという評価を再考した。留学生に拘らず、学校卒業生に対する官職の空きがなかったこと、留学生自身は「依願免本官」として官吏任命を拒否していること、年齢的に日露戦争以後に官吏に任用され始めることは自然であること、そして本稿で改良した統計結果を総合して考察した結果、留学生は「官僚志向的」ではなかったと結論付ける。

第三に、申海永を中心とするグループは、帰国後、独立協会と協調しつつも独自に活動しており、万民共同

会解散後も教員活動を転々としつつ独自の自強運動を展開したことを指摘した。彼らは大韓俱樂部を結成し親睦を深め、『法政学界』、法学協会を通じて知識を磨いた。しかし、彼らは政治運動には参加しなかった。それは彼らが研究者志向であったからだと考えられる。

個々人の活動は多様であるが、申海永一派は大方「韓国併合」後も独立運動に参加しない態度を維持している。そのため、厳しい評価を与えられている留学経験者がいることも事実である。しかし、文壇や討論会、あるいは武器を手に取り、声高らかに主張を展開することだけが自強運動ではない。日本留学経験者たちは当時最高の知識人としての役割を堅守したのであり、黙々と研究に努めた。その成果は教育を通じて次世代に伝わっている。技術職に就いた者もまた同様である。留学生派遣政策は、そういった点も視野に入れて評価すべきである。

注

- (1) 甲午改革、または甲午更張とは、朝鮮が「近代国家」へ転換するために行った政治制度改革のことを指す。日本が景福宮を占領し親日政権を樹立させた時点から露館播遷までを指すことが一般的である。甲午改革の研究として、王賢鍾『韓国近代国家の形成と甲午改革』歴史批評社（韓国語）、二〇〇三年。
- (2) 本稿で扱う時期は朝鮮から大韓帝国に渡るが、便宜上呼称は「朝鮮政府」とする。
- (3) 何を以て留学とするかの定義により、研究者によって留学生の数が異なる。以下、「留学生」あるいは「留学経験者」と呼ぶときはこの留学生を指すものとする。
- (4) 近年の論文のみ挙げる。崔徳寿「開化期日本の朝鮮人留学政策の性格」『国史館論叢』七二（韓国語）、一九九六年。都倉武之「朝鮮王族義和宮留学と福沢諭吉」『近代日本研究』二二、二〇〇五年。金淇周「甲午改革期朝鮮政府

- の対日留学政策」『歴史学研究』二七（韓国語）、二〇〇六年。同「露館播遷後（一八九六～一九〇三）韓国政府の留学政策」『歴史学研究』三四（韓国語）、二〇〇八年。拙稿「甲午改革期渡日留学生派遣政策の展開と中断過程」『韓国史学報』五六（韓国語）、二〇一四年。
- (5) 日本語文献のみ挙げる。李基俊『西欧経済思想と韓国近代化』東京大学出版会、一九八六年。国分典子『近代東アジア世界と憲法思想』慶應義塾大学出版会、二〇一二年。
- (6) 西沢直子・王賢鍾「明治期慶應義塾への朝鮮留学生（一）」『近代日本研究』三二、二〇一四年。姜兌玟・西沢直子「明治期慶應義塾への朝鮮留学生（二）」『近代日本研究』三三、二〇一五年。
- (7) 車培根「開化期日本留学生たちの言論出版活動研究（Ⅰ）」ソウル大学校出版部（韓国語）、二〇〇〇年。
- (8) 朴賛勝「一八九〇年代渡日留学生の現実認識」『歴史と現実』三一（韓国語）、一九九九年。同「一八九〇年代後半における官費留学生の渡日留学」宮嶋博史、金谷徳編『近代交流史と相互認識Ⅰ』慶應義塾大学出版会、二〇〇〇年。二〇〇〇年刊行の論文は日韓両言語で同時に刊行されている（韓国語版は亜研出版部で刊行）。
- (9) 朴賛勝、前掲（二〇〇〇年）、七〇頁、一一三頁。
- (10) 「自強運動」または「愛国啓蒙運動」の類型については、月脚達彦の整理を挙げておく。月脚達彦『朝鮮開化思想とナシヨナリズム』東京大学出版会、二〇〇九年、三四九～三五一頁。
- (11) 一九〇五年以後、留学生監督としての申海水を考察した研究として、金範洙「旧韓末における留学生監督に関する一考察」『朝鮮学報』一九一、二〇〇四年。また、申海水の翻訳書『倫理学教科書』を分析した研究として、金素玲「韓末修身教科書翻訳と「国民」形成」『韓国近現代史研究』五九（韓国語）、二〇一一年。
- (12) 阿部洋「史料」韓国政府委託慶應義塾留学生に関する契約書『韓』一〇三、一九八六年。金祥起「未発表資料」『慶應義塾入社帳』（韓国留学生編）『争点韓国近現代史』四（韓国語）、一九九四年。金洪周、前掲（二〇〇六年）。西沢直子・王賢鍾、前掲。なお、本稿では慶應義塾を経ない留学生も考察対象としている。これについては、本文で

適宜指摘する。

- (13) 朴賛勝、前掲（二〇〇〇年）、七五頁。車培根、前掲、七三～七四頁。
- (14) 「朝鮮学生の同遊学会」『読売新聞』一八九五年五月二日付二面。引用文には句読点を補う。以下同。
- (15) 朴賛勝、前掲（一九九九年）、二二頁。車培根、前掲、八三～八四頁。
- (16) 「朝鮮の少年日本に走る」『東京朝日新聞』一八九四年四月八日付一面。
- (17) 『早稲田大学百年史』一、一九七八年、九一八頁。
- (18) 「朝鮮語学会」『読売新聞』一八九四年二月二八日付三面。
- (19) 「明治議会の朝鮮語学科」『毎日新聞』一八九五年二月二〇日付六面。「広告」『東京朝日新聞』一八九五年二月二二日付六面。
- (20) 「朝鮮教育実施視察」『教育時論』三六四号、一八九五年五月二五日。この記事は一八九五年一月から四月一〇日までを反映したものである。
- (21) 師範学校の設立過程については、金京美『韓国近代教育の形成』へアン（韓国語）、二〇〇九年、一一一～一二九頁。
- (22) 「朝鮮時事 二月二日」『東京朝日新聞』一八九四年二月一四日付二面。
- (23) 稲葉継雄『旧韓国の教育と日本人』九州大学出版会、一九九七年。同『旧韓末「日語学校」の研究』九州大学出版会、一九九七年。
- (24) 「同上（朝鮮時事） 一月二八日」『東京朝日新聞』一八九四年二月六日付二面。
- (25) 拙稿、前掲、二二〇～二二二頁。玄公廉、慎順賊、高義駿、朴基駿、姜璟熙の五名は日語学校三年生（すなわち甲級）であったことが確認できる（「朝鮮時事（一八九四年二月二七日発）」『東京朝日新聞』一八九五年一月一日付二面）。

- (26) 「風雲変態録 二月四日発」『東京日日新聞』一八九五年二月二十五日付一面。
- (27) 「朝鮮学生」『日本』一八九五年四月一〇日付二面。
- (28) 車培根、前掲、六九〜七〇頁。
- (29) 「韓山近事(四月二〇日)」『日本』一八九五年四月二十八日付一面。
- (30) 「朝鮮留学生の教育」『時事新報』一八九五年五月一〇日付四面。
- (31) 国史編纂委員会編『官員履歴書』一九七二年、一五七頁、八五六頁。金鴻南、安昌善共に一八九四年に日語学校に入学しているため、一年生と断定できる。
- (32) 『大韓帝国官員履歴書』一二四頁、二一九頁。共に一八九四年に日語学校に入学。
- (33) 二名の日語学校出身者を留学順に整理すれば、洪奭鉉(一八九四年三月)、朴基駿、李龍在、姜璟熙、高義駿、玄公廉、慎順賊(以上一八九四年冬)、申海永、金重漢、卞志琯、金允求、張明根、朴正善、趙元奎、金東完、劉文相、吳亭根、金鴻南、安昌善(以上一八九五年五月)、金益南、朴正銑(以上一八九五年六月)である。
- (34) 『大韓帝国官員履歴書』一〇六頁、一二三頁、一九二頁、三五〇頁。
- (35) 「親陸会日記」一八九五年五月二二日(陰曆四月一八日)条『親陸会会報』一、一八九六年二月、九六〜九七頁。原文は漢文。以下、漢文、韓国語資料は翻訳して提示する。また「親陸会日記」は日付のみを提示する。
- (36) 「親陸会日記」一八九五年七月二三日(陰曆閏五月二二日)条。
- (37) 「朝鮮人親陸会」『日本』一八九五年七月一〇日付二面。
- (38) このいきさつについて、車培根、前掲、一四四〜一四七頁。朴贊勝、前掲(一九九九年)、一二六〜一二七頁。
- (39) 以下、日韓倶楽部に関する記述は次の史料に基づく。『早稲田学報』三、一八九七年五月、七六頁。同、五、一八九七年六月、一二五頁。同、一五、一八九八年五月、八八頁。同、一六、一八九八年六月、七四頁。
- (40) 「朝鮮留学生親陸会」『読売新聞』一八九六年一〇月一二日付二面。

- (41) 「亡命韓客の軋轢」『読売新聞』一八九七年五月三日付二面。
- (42) 「親陸会日記」一八九七年五月一日条。
- (43) 「朝鮮学生の奮怨」『国民新聞』一八九七年五月一日付六面。国会図書館所蔵マイクロフィルムを利用。紙面状態が悪く一部判読不能。これまで検討されなかった資料のため、原文で提示する。
- (44) 「親陸会日記」一八九七年五月二六日条。
- (45) 「親陸会日記」一八九七年五月二七日条。国民新聞社は五月一日付(三二面)で訂正文を掲載した。
- (46) 「朝鮮留學生親陸会の紛擾」『日本』一八九七年五月二八日付二面。
- (47) 洪奭鉉『新撰朝鮮會話』博文館、一八九四年(釜山広域市立市民図書館所蔵本)。なお、国会図書館にも同書が所蔵されているが、徳富蘇峰の序文は付いていない。
- (48) 「寄書」朝鮮留學生弾劾事件に対する弁駁 朝鮮留學生洪奭鉉『読売新聞』一八九七年五月二九日付三二面。
- (49) 朴贊勝、前掲(二〇〇〇年)、八四頁。
- (50) 鄭喬『大韓季年史』(趙珧編訳、ソミョン出版、二〇〇四年)五、一八九九年一月条、二三三頁。
- (51) 『大韓興學報』一三、一九一〇年五月、二頁。
- (52) 帝國青年会については先行研究で指摘されている。朴贊勝、前掲(一九九九年)、一二八〜一二九頁。しかし、資料不足で詳しいことは不明である。
- (53) 「安泳中の朴泳孝談」『大阪毎日新聞』一八九八年一〇月二日付一面。「朴泳孝一行(六日午後東京発)」同、一〇月八日付二面。この時、申海永は朴泳孝一行と共に帰国の途に就いたが、朴泳孝は下関で帰国を思い留まった。
- (54) 朴贊勝、前掲(二〇〇〇年)、一〇九頁。
- (55) 朴贊勝、前掲(二〇〇〇年)、一一〇頁。
- (56) 「利用於國」『皇城新聞』一八九八年二月一九日付二面。なお、洪奭鉉は一八九八年七月に東京専門学校を卒業し

ている。

- (57) 成淑璟「甲午改革以後（一八九四〜一八九九）成均館の近代的再編」『韓国近現代史研究』三九（韓国語）、二〇〇六、一四〇〜一四一頁。

- (58) 権鳳洙（一九〇二年一月、宮内府水輪課主事）、金基璋（一九〇五年一月、厚陵參奉）、金東圭（一九〇〇年六月、中樞院議官）、金相淳（一九〇四年七月、通信司電話課主事）、金重漢（一九〇二年一月、懿陵參奉）、徐廷岳（一九〇二年七月、惠民院主事）、安慶善（一九〇三年八月、中樞院議官）、俞承兼（一九〇六年五月、度支部主事）、李寅植（一九〇二年七月、惠民院主事）、李正熙（一九〇一年一月、咸鏡北道觀察府主事）、李昌植（一九〇一年八月、内部主事）、李憲珪（一八九九年九月、通信司電話課主事）、崔万淳（一九〇〇年二月、慶尙北道觀察府主事）、洪爽鉉（一九〇一年三月、中樞院議官）。年月は依願免本官の日であり、任命後すぐに辞退した者を挙げている。調査は次の文献に拠る。安龍植『大韓帝国官僚史研究』I〜IV、延世大学校社会科学研究所（韓国語）、一九九四〜一九九六年。

- (59) 『銓考請願書』（ソウル大学校奎章閣資料、奎三二六三六二）。なお、韓震用はこの請願書の結果であろうか、一九〇五年六月一日に敦寧司主事に任命されている。

- (60) 鄭求先『韓国近代官吏任用研究』国学資料院（韓国語）、二〇〇八年、五六頁、六一頁。

- (61) 留学時の平均年齢は二一歳である（金洪周、前掲（二〇〇六年）、二二四頁）。

- (62) 留学生の大半は成績が芳しくなかった。拙稿、前掲、二二九〜二三二頁。

- (63) 朴贊勝、前掲（二〇〇〇年）、九七頁。車培根、前掲、二一〇〜二二一頁。なお、朴贊勝の整理した〈表四〉では張奎煥（張燾）が漏れている。車培根は王重植を卒業したものと判断して七三名としている。

- (64) 尹致旣、康永祐、姜龍甲、権鳳洙、金教先、金奎福、金基璋、金大熙、金東完、金明集、金鎔濟、金允求、金重漢、金亨燮、金鴻南、南舜熙、朴完緒、朴正善、申佑善、申海水、安昌善、安衡中、魚潭、魚瑢善、嚴柱日、王堉

植、劉文相、兪承兼、兪鎮方、劉昌熙、兪致学、尹世鏞、李敬承、李冕宇、李正熙、李周煥、張明根、張承斗、張憲植、張浩翼、全泰興、鄭錫煥、鄭寅昭、鄭在淳、鄭海英、趙齊桓、池承浚、崔相敦、崔永植、洪仁杓、金東圭、金益南、金鴻鎮、盧景輔、朴晚緒、朴正統、卞河璣、安慶善、廉学雨、吳聖模、禹泰鼎、陳熙星、崔炳台、韓震用、玄櫛、徐廷岳、安明善、金鼎禹、元応常、尹致晟、李憲珪、崔万淳、金成殷。

(65) 姜友善、金相淳、金祥演、金鴻卿、朴宗桓、卞国璿、慎順晟、嚴柱鳳、李寅植、李昌植、李漢相、李浩璋、河允泓、扈根爽、洪爽鉉。『親睦会会報』から調査。

(66) 金教善、金奎福、金成殷、金亨燮、金鴻南、盧景輔、朴正善、魚潭、尹致晟、張明根、張浩翼、鄭海英、崔炳台。車培根、前掲、二一〇～二二一頁。なお、統計には含めるものの、帰国後に軍人コースに進んだケースもある（金鴻鎮）。

(67) 脚註六六に挙げた人物のうち、盧景輔、朴正善、崔炳台を除いて全員武官に任命された。なお、本稿では扱わないが、彼らの一部は一九〇二年に「革命一心会事件」と呼ばれるクーデター未遂事件を起こしている。

(68) 康永祐、權鳳洙、金基璋、金大熙、金東圭、金東完、金明集、金相淳、金祥演、金鎔濟、金允求（金倫求）、金益南、金鼎禹、金重漢、金鴻卿、南舜熙、朴晚緒、朴正統、朴宗桓、卞国璿、卞河璣、徐廷岳、申佑善、申海水、安慶善、安明善（安国善）、安昌善、安衡中、魚塔善、魚允迪、嚴柱一（嚴柱日）、吳聖模（吳洞根）、禹泰鼎、元応常、劉文相、兪鎮方（兪鎮尙）、兪承兼、劉昌熙（劉文煥）、兪致学（兪致衡）、尹邦鉉、尹世鏞、尹致昨、李敬承（李敬珪）、李冕宇、李寅植、李正熙、李周煥、李昌植、李漢相、李憲珪、張奎煥（張憲）、張憲植、全泰興、鄭錫煥、鄭寅昭（鄭寅韶）、鄭在淳、趙齊桓、陳熙星、崔万淳（崔万達）、崔相敦、崔永植（崔奎翼）、河允泓、韓震用、玄櫛、扈根爽、洪爽鉉、洪仁杓。安龍植、前掲。名の変更は安龍植の研究で確認または同定している。

(69) 康永祐、金東圭、金明集、金相淳、金允求（金倫求）、金益南、金鼎禹、金重漢、金鴻卿、南舜熙、卞国璿、卞河璣、徐廷岳、申海水、安慶善、安明善（安国善）、安昌善、魚塔善、禹泰鼎、元応常、劉文相、兪鎮方（兪鎮尙）、兪

- 致学（俞致衡）、尹邦鉉、尹致昨、李冕宇、李寅植、李正熙、李周煥、李昌植、李漢相、李憲珪、張奎煥（張憲）、陳熙星、崔万淳（崔万達）、崔相敦、崔永植（崔奎翼）、河允泓、玄櫛、扈根奭、洪奭鉉。安龍植、前掲。
- (70) なお、朴贊勝は「依願免本官」した留学経験者を除外しており、また、軍人を統計に含めている。本稿では士官学校出身者を除外しているが、彼らを統計に含めれば、当然ながらこの比率はさらに上がる。
- (71) 金大熙、金益南、金鼎禹、朴晩緒、朴正統、徐廷岳、安昌善、安慶善、安衡中、俞鎮高、劉昌熙、俞致学、李冕宇、李寅植、李周煥、李漢相、張燾、鄭寅昭、崔奎翼、韓震用、玄櫛、洪奭鉉、洪仁杓。『学部来去文』七、八、九冊、及び『駐日來案』七、八、九冊から調査。上記の他、宋修用、林春喜、韓明淳の三名が大学卒業生として確認できているが、甲午改革期渡日留学生と確認できないため、除外している。
- (72) 朴贊勝、前掲（二〇〇〇年）、九七頁。
- (73) 独立協会運動については、月脚達彦、前掲、「第五章 独立協会の「国民」創出運動」。
- (74) 『雑報』『独立新聞』一八九六年九月二二日付二面。『論説』同、一八九六年一〇月八日付一面。『雑報』同、一八九六年一二月七日付一面。『論説』同、一八九七年四月八日付一面。
- (75) 『大朝鮮独立協会会報』四、一八九七年一月、六〜九頁。同、七、一八九七年二月、六〜一〇頁。
- (76) 『大朝鮮独立協会会報』一五、一八九七年六月、一〇〜一三頁。
- (77) 강흥구（姜容九か）、『大朝鮮独立協会会報』第六号、以下同）、權鳳洙（第四号）、金東奎（金東圭か、第九号）、吳聖模（第十八号）、李正熙（第一号）、鄭瑀容（第四号）、김석윤（金錫胤か、第八号）、張休（張休か、第一号）。
- (78) 『朝鮮キリスト人会報』一卷一〇号、一八九七年四月、七面。『大韓キリスト人会報』二卷一五号、一八九八年四月、一面。『大韓キリスト人会報』二卷二六号、一八九八年六月、二面。
- (79) 『京城特報』五月二五日発。『時事新報』一八九八年六月三日付一面。
- (80) 鄭喬『大韓季年史』五（前掲）、一八九九年一月条、二三頁。

- (81) 「京城特報 一二月一九日発」『時事新報』一八九八年二月一日付六面。
- (82) 「部中日記」『大韓倶楽』一、一九〇七年四月、四〇頁。以下、大韓倶楽部の概要は「部中日記」を引用したものである。
- (83) 金祥演は農商工部が勸業博覧会視察のため一八九五年五月に派遣した四人の学員の一人であり（「照会」『農商工部 来去文』一、一八九五年五月二二日（陰曆四月二八日）発信）、金祥演のみそのまま留学生として日本に残った。一九〇二年六月の時点で東京専門学校三年政治学科に在籍していることが確認できる（「照会第十一号」『学部来去文』一、一、一九〇二年六月二〇日発信）。
- (84) 「懇親光景」『皇城新聞』一九〇五年九月二六日付二面。
- (85) 会員名簿の記載数は二二二人であるが、洪在箕が重複して記載されているため、二二一人となる。
- (86) 『大朝鮮独立協公会報』から調査。任員は、具然韶、権在衡、金嘉鎮、金昇圭、金在豊、金宗漢、金重煥、南宮櫛、文台源、閔商鎬、閔泳綺、朴箕陽、朴承祖、朴鎔奎、白性基、徐彰輔、宋憲斌、沈相薫、沈宜碩、安駒寿、安寧洙、呉世昌、兪箕煥、柳正秀、李建鎬、李啓弼、李根永、李根浩、李秉武、李商在、李完用、李寅祐、李在正、李鍾夏、李采淵、李夏榮、鄭顕哲、趙東潤、彭翰周、韓圭高、玄濟復、玄興沢、洪禹觀。
- (87) 「大意哉三氏」『皇城新聞』一八九八年九月二四日付三面。
- (88) 「広告」『皇城新聞』一八九八年一月九日付四面。
- (89) 「法律教師」『皇城新聞』一九〇〇年二月一日付二面。
- (90) 「学事漸興」『時事叢報』一八九九年五月一日付三面。
- (91) 朴賛勝、前掲（二〇〇〇年）、一〇一頁。
- (92) 「学員募集広告」『皇城新聞』一九〇五年一月一六日付三面。他に石鎮衡、崔恒錫、大明軾、洪在祺。
- (93) 高麗大学校百年史編纂委員会編『高麗大学校百年史Ⅰ』高麗大学校出版部、二〇〇八年、五二―五三頁。他に朴承

赫、石鎮衡、鄭永沢、洪在祺。

- (94) 留学生監督としての中海永については、金範洙、前掲。
- (95) 「特別広告」『皇城新聞』一九〇七年一月二一日付三面。
- (96) 理由として、この集会以後、大韓俱樂部に関する新聞報道がない。鄭永沢が大韓俱樂部臨時事務所で講師を集めたという記事があるが（『講師会同』『大韓毎日申報』一九〇八年二月一三日付二面）、団体自体は消滅しているものと思われる。
- (97) 本稿、表を参照。
- (98) 一九〇八年一月一九日、畿湖興学会創立総会は、普成小学校で行われ（『畿湖興学会月報』一、一九〇八年八月、四四頁）その後、二月九日定期総会、三月一五日畿湖西北両学会役員懇親会、は普成専門学校で行われている（同上、四五頁、四七頁）。
- (99) 『大韓倶楽』は毎月発刊の予定であったが、一九〇七年四月と七月の二回の発行で終わった。
- (100) 「特別広告」『皇城新聞』一九〇六年一月一六日付四面。
- (101) 一進会については、次の研究を挙げておく。林雄介「一進会の前半期に関する基礎的研究——一九〇六年八月まで」武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版社、一九九七年。
- (102) 全文は李寅燮『元韓国一進会歴史』二、文明社、一九一一年、一〇六―一〇七頁。
- (103) 「大韓俱樂部函繳」『皇城新聞』一九〇五年一月一四日付三面。または『大韓倶楽』一、一九〇七年四月、四二―四三頁。原文は国漢文。
- (104) 『法政学界』一、一九〇七年五月、前付、六四頁。
- (105) 「維持会事件」については詳しく触れない。先行研究として、裴允燮「高宗と普成専門学校の創立及び初期運動」『史叢』五九（韓国語）、二〇〇四年。

- (106) 養正義塾についての先行研究として、金孝全「養正義塾の法学教育」『法官養成所と近代韓国』ソミョン出版（韓国語）、二〇一四年。
- (107) 「広告」『皇城新聞』一九〇五年四月一日付四面。
- (108) 「養正進就学」『皇城新聞』一九〇六年五月八日付三面。
- (109) 「入学を請願」『大韓毎日申報』一九〇八年三月五日付三面。「教授経済」『皇城新聞』一九〇八年三月七日付二面。
- (110) 『高麗大学校百年史Ⅰ』五二頁、一三五頁。なお、この章の執筆者は裴允燮である。
- (111) 裴允燮、前掲、二四三頁。
- (112) 崔鍾庫「韓末・日帝下法学協会の活動」『韓国法学史』博英社（韓国語）、一九九〇年。
- (113) 李庸昌「伊藤博文追悼会」開催前後「社会勢力」の動向と親日政治勢力の形成『史学研究』六九（韓国語）、二〇〇三年。
- (114) 伊藤博文官民追悼会には申佑善、魚瑢善、魚允迪、元応常、兪承兼、張憲植、趙齊桓、崔相敦、伊藤博文国民大追悼会には金鎔濟（発起人）、劉文煥、李冕宇、張燾の参加が確認できる（李庸昌、前掲、一一九頁、一二二頁）。
- (115) 李庸昌、前掲、一二二頁。
- (116) 「追悼会参否調査」『皇城新聞』一九〇九年一月一〇日付二面。
- (117) 留学生の官吏就職状況の調査は、朴賛勝、前掲（二〇〇〇年）、一一〇～一二四頁。
- (118) 安重根の弟安定根と安泰根の身边が事件後に不安定になったと報道されている（「不安辞職」『皇城新聞』一九〇九年一月一八日付二面）。
- (119) 李庸昌、前掲、一二五頁。
- (120) 「監督申海永氏病没始末」『大韓興学报』六、一九〇九年一〇月、六四～六六頁。金範洙、前掲、九五頁。
- (121) 「監督申海永氏病没始末」前掲。

- (122) 「親知弔礼」『皇城新聞』一九〇九年九月二八日付二面。
(123) 「申氏追悼会」『大韓毎日申報』一九〇九年十一月三日付二面。